

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第19号

平成27年11月17日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

国を混乱させた大義なき支配者、足利氏

幕末のベストセラー、頼山陽の「日本外史」

日本外史を貫く「名分論」

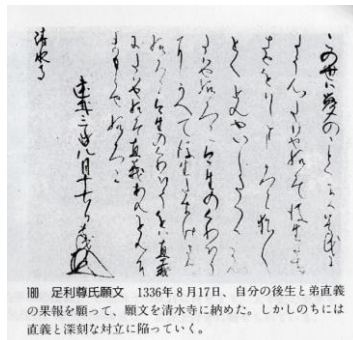
頼山陽（らいさんよう）（安永9年1780～天保3年1832）が書いた「日本外史」は、天保7年1836に刊行され、幕末の頃にはすっかり『志士の必読書』としてベストセラーだったようです。

同書は、平安時代の源平の争乱から徳川家康による江戸幕府開闢までの武士の歴史を書き連ねた歴史書です。

日本外史を貫くのは徹底した「名分論」です。

朱子学に云う名分論は、「上下関係・身分の違いを絶対視する考え方で、日本では、この名分論は天皇を絶対的に敬う「尊王思想」につながります。

「日本外史 幕末のベストセラーを「超」現代語訳で詠む」（頼山陽著・長尾剛訳：PHP研究所刊）に載る足利氏の項をのぞいてみましょう。



ず、あの源氏は、天皇の土地たる国土を盗み、あまつさえ天皇に近い臣下を、己の手の内に引きずり込もうとした。さらに足利氏は、やはり天皇の土地を盗み、あまつさえ天皇に近い臣下たちを、己の配下のごとくいいようにこき使った。比べてみるに、足利氏の方がタチが悪いし、罪が重い。

頼山陽は、“後醍醐天皇が行った建武の中興を横取りする形で、天下を奪った。盗人に正義なく、天下に君臨する正当な根拠もなく、だから誰もついていかない。そこで足利氏は、やたらと褒美を乱発し、領土を振舞った。家臣たちの欲望に応じて、実利のエサで釣ったのである。”と、まで足利氏をこき下ろしています。

天皇の「名」を奪おうとして天罰を受けた平将門、天皇の「実」をまんまと盗みおおせた源頼朝、そしてその「名」も「実」も両方奪おうとし、一時はまんまと盗めたようなものの、結局は天罰を食らって何もかも失った愚か者、足利氏が現れた、と。

建武の中興を横取り

足利氏正記「足利氏」の冒頭、以下の書き下し文が載っています。

◇足利氏論贊 書き下し文

外史氏曰く、源氏は王土を偷（ぬす）み、以て王臣を摟（ひ）く者なり。足利氏は王土を奪ひ、以て王臣を役する者なり。故に足利氏の罪を論ずれば源氏に浮（す）ぐ。而して源氏は再伝して亡び、足利氏は乃ちこれを十三世に延（ひ）くを得たる者は、蓋し源氏は宗族を剪除（せんじょ）して、孤立自ら斃（たお）る。

我が国の国土はすべて天皇のものであるにもかかわら

正行の悲哀、無念にじむ

頼山陽の論を借りれば、徹底して皇室を利用した足利氏は、絶対許せない極悪な一族に映ったのでしょうか。

正行と対峙したのがこの足利尊氏。

正成から遺訓を受けた正行の忠孝の姿勢からすれば、このような足利尊氏との協調などありえず、南北朝の統一は、至難の業であったのだろうと推測できます。

頼山陽がこき下ろした足利尊氏。しかし、その尊氏の配下、高師直に敗れた楠正行。正統な南朝復権ただ一筋に生きぬいた正行の悲哀、無念を感じざるを得ません。

（文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭）